

お兄ちゃんのラブドール

## 梗概

小野はるか(13)の兄幸太郎(15)は若くしてガンを発病し余命いくばくの命だった。

そんな幸太郎の唯一の心残りは女を知らないまま死んでゆくことだった。

ある日、見舞いにいったはるかは幸太郎から「胸を揉ませろ」と迫られる。

不穏な頼み事はエスカレートし、ついには童貞を卒業するためのデリヘル代をパパ活で稼ぐようはるかは幸太郎に命じられる。

無理難題をいう兄のために奔走するはるかだったが、自分のことばかり考えて家族を顧みない幸太郎に痺れを切らす。

そんな中、幸太郎の病状が急変する。

母親の胸で泣き崩れる兄の姿を目撃したはるか  
かは覚悟を決めてマッチングアプリに手を出  
す。

危険を冒しつつも金集めに成功したはるかだ  
ったが、15歳の孝太郎ではデリヘル嬢を呼べ  
ず、結局、兄の童貞卒業の願いは叶わずじま  
い。

落ち込む幸太郎のためにはるかはラブドール  
を買うことを思いつき、こっそりラブドール  
を組み立てる。

その夜、はるかはラブドールを持って幸太郎  
のいる病室に忍び込み、ラブドールの声を演  
じることで本物のデリヘル嬢だと幸太郎に信  
じ込ませる。

はるかのかの企みによって童貞を卒業した幸太郎

だったが、もう一つの心残りとして「妹を守ってやれなくなる」と妹への思いをラブドールに明かし、はるかは初めて兄の優しさを知る。

幸太郎の死後、はるかは遺影の中で笑う兄へ精一杯の愛情を込めて微笑み返すのだった。

《登場人物》

小野はるか (5) (13) 中学生

小野幸太郎 (7) (15) はるかの兄

小野優子 (40) はるかの母

速見 (44) はるかの担任

女の子

○小野家・リビング（夜）

テーブルの上に中トロの刺身。

幸太郎（15）、中トロが盛られた皿を独り占めしている。

幸太郎、中トロをうまそうに食べる。

はるか（13）、羨ましそうに見ている。

キッチンから母優子（40）、サラダを持ってやってくる。

優子「（サラダを置き）どう？ 今日のは脂のつてるでしょ」

はるか「∴中トロ。私も食べたい」

幸太郎、黙々と食べている。

優子「（笑う）はるかにはハンバーグ作ってるから。待ってて」

優子、キッチンへ戻る。

はるか「∴」

幸太郎「わさび」

幸太郎、キッチンを見て、

幸太郎「お母さんわさび！」

優子の声「はるか！ お母さん手が離せない

からお兄ちゃんにわさび持ってきてあげて。

冷蔵庫の扉にあるから」

はるか、渋々立ち上がる。

はるか、冷蔵庫からわさびを取る。

はるか、わさびのチューブを持ってくる。

はるか「はい」

幸太郎「置け」

はるか「∴」

はるか、わさびのチューブを幸太郎の前におく。

幸太郎、サラダを食べている。

幸太郎、箸でつまんだレタスを服の上に

落としてしまう。

幸太郎、ティッシュを探す。

ティッシュ、見あたらない。

幸太郎「ティッシュ！」

優子の声「はるか！ 悪いけど持ってきてあげて！ 台所の棚に入ってる」

はるか「∴」

はるか、渋々立つ。

× × ×

片付けられたテーブル。

優子、デジカメを構えている。

幸太郎、スマホをいじっている。

はるか、テレビを見ている。

優子「撮るよー。ほら。二人ともこっち向いて」

はるか、カメラをみて仕方なく微笑む。

優子「幸太郎も」

幸太郎、真顔でカメラをみる。

優子「はいチーズ」

優子、カメラのシャッターを押す。

○はるか、幸太郎のツーショット写真

はるかM「この物語のあらましはこうだ」

○アルバムソフトの画面

先ほどのツーショット写真が表示されて

いる。

日付の表示は「2月20日」。

アルバムのページがパラパラとめくられていく。

日付がさかのぼる。

日付は「2月15日」。

苦痛に顔を歪める幸太郎の写真。

はるか「突然、腹痛を訴える兄」

ページがめくられる。

病院の診断室で真っ青になっている優子の写真。

はるか「兄がステージのガンであることを医者から宣告される母」

ページがめくられる。

学校でテニスラケットを振るはるかの写真。

はるか「部活をする私」

ページがめくられる。

仏壇の前でぼんやりとたたずむ優子の写真。

はるか「父の遺影の前で呆然とする母」

ページがめくられる。

日付が進み、「2月17日」。

病院の診断室であっけにとられている孝

太郎の写真。

はるか「医者の手違いによって余命宣告を  
聞かされる兄」

ページがめくられる。

両膝について絶叫する孝太郎の写真。

はるか「雄叫びをあげる兄」

ページがめくられる。

髪の毛が真っ白になる優子の写真。

はるか「ショックで老ける母」

ページがめくられる。

しれっとカルテを書き出す医者の写真。

はるか「しれっとする医者」

ページがめくられる。

学校でテニスラケットを振るはるかの写

真。

はるか「部活をする私」

ページがめくられる。

日付が進み、「2月18日」。

ドイツニerlandで遊ぶはるか、孝太郎、  
優子の写真。

はるか「豪遊する私たち」

ページがめくられる。

ジャスミンのマジックカーペットに立つ  
たまま乗る幸太郎の写真。

はるか「自暴自棄になる兄」

ページがめくられる。

高級寿司店のカウンターに座っているは  
るか、孝太郎、優子の写真。

はるか「値段の書かれていない寿司屋で食  
事をする私たち」

ページがめくられる。

中トロを口の中いっぱい詰めて込む孝太  
郎の写真。

はるか「自暴自棄になる兄」

ページがめくられる。

むせた孝太郎の背中をさする優子の写真。

はるか㊦「頑張ってガンと闘おうと励ます母」

ページがめくられる。

タマゴを食べるはるかの写真。

はるか㊦「タマゴで我慢する私」

ページがめくられる。

日付が進み、「2月20日」

冒頭のツーショット写真に戻る。

はるか㊦「中トロを堪能した兄とハンバーグ  
で我慢した私」

ページがめくられる。

日付が進み、「2月21日」。

玄関を開けて病院へと向かう幸太郎の後  
ろ姿の写真。

はるか㊦「病院へ赴く兄」

アルバム、閉じられる。

表紙にタイトルがでる。

○タイトル

○中学校・教室（数日後）

はるか、授業を受けている。

○同・廊下（放課後）

生徒ら、帰っている。

はるか、廊下の隅に立ちどまる。

はるか、スカートのポケットからこっそ

りスマホを取り出す。

はるか、スマホをみる。

LINE画面に優子から以下のメッセージ。

「幸太郎に着替え届けて」

と、近くで怒鳴り声がある。

声「こら！ 廊下を走るな！」

はるか「（ビビる）」

はるか、スマホを落としてしまう。

はるか、慌ててスマホを拾う。

はるか、顔をあげる。

はるかの目の前に速見（44）が立っている。

はるか、慌ててスマホを隠す。

はるか「（まずい）」

速見「…小野。今日も部活休むのか？」

はるか「あ、はい。すみません」

速見「(優しげに)そうか。お兄さんのことでお前も大変だろう。困ったことがあれば遠慮せずに俺に相談しろよ」

小野、去っていく。

はるか「(嬉しい)」

#### ○病院・外観

#### ○同・大部屋

小さな子供たちが入院している小児病棟の一室。

はるか、着替えの入ったバッグを持って入ってくる。

入口には椅子がおかれており、クマのぬいぐるみが座らされている。

はるか「…？」

クマ「お姉ちゃん、こんにちわ！」

はるか、驚く。

はるか、クマを見ると、スピーカーがつけられている。

はるか「こんにちわ」

クマ「名前はなんていうの？」

はるか「はるか」

マイクを持った小さな女の子がベッドから顔を覗かせている。

女の子、はるかと目が合うと顔を引っ込める。

はるか「（笑みがこぼれる）」

はるか、部屋の隅のベッドの前にいく。

ベッドはカーテンで締め切られている。

はるか「お兄ちゃん？ 着替えもってきたよ」

はるか、カーテンを開ける。

幸太郎、焦った様子でパジャマのズボンを開ける。

幸太郎「…着替え中だ。部屋に入ってくるときはノックをしろ」

ベッドの脇に使用済みティッシュの山。

はるか「（視線をやる)…」

幸太郎「(ぼやく)さっきから鼻水がでてしょうがない」

幸太郎、鼻をかむが、全然かめていない。

幸太郎「(スースー音)」

幸太郎、使用済みティッシュをビニール袋へ捨てる。

はるか「∴これ、着替え」

はるか、バッグを差し出す。

幸太郎「置き」

はるか、バッグを床に置く。

幸太郎「ドアをしめろ」

はるか「∴カーテンだけど」

幸太郎「部屋のドアをしめろ」

はるか、カーテンをしめる。

カーテン内に二人きりになる。

幸太郎、神妙な面もちになる。

幸太郎「死ぬ前に一つ頼みがある」

はるか「∴？」

幸太郎「胸を揉ませろ」

はるか、ぽかんとする。

はるか「…は？」

幸太郎「誤解するな。お前に性的興味などもっていない。これは男としての…」

はるか、「(遮って)お母さんに言いつける」

はるか、スマホを取り出す。

幸太郎「(焦る)お、おい！ やめろ！」

はるか、スマホをいじる。

幸太郎「(痛がる)くっ…腹が…腹がっ…」

はるか、手がとまる。

幸太郎「(苦しそうに)お前のせいで腹が…」

はるか、渋々スマホをしまう。

幸太郎「気をつける。俺の体の中には時限爆弾が仕込まれている。破裂したら最後だ」

はるか「…」

幸太郎「医者から聞いたが、もう手術をしても取り出せない。若者はガンの進行が早く手遅れだと。つまり、死ぬのを待つしかない」  
はるか「…」

幸太郎「さっき学校の友達が見舞いにきた。当たり前障りのない実に退屈な会話だったよ。」

血の繋がったお前とはそんなふうには話したくない」

はるか「∴」

幸太郎「俺、死ぬよな？」

はるか「でも、わかんないよ。お母さんだつていってたけどもしかしたら∴」

幸太郎「(遮って)死ぬんだ」

はるか「∴」

幸太郎「胸を揉ませろ」

はるか「え、なんでそうなるの？」

幸太郎「男としてのメンツの問題だ」

はるか「意味わかんない」

幸太郎「胸の感触を知らないままでは死んでも死にきれん(と歯ぎしりをする)」

はるか「∴無理だよ」

幸太郎「頼む」

幸太郎、頭を下げる。

はるか「∴」

幸太郎、頭を下げ続ける。

はるか「(泣く泣く)∴目、つぶって」

幸太郎「（顔をあげる）なぜだ？」

はるか「気持ち悪いから」

幸太郎、目をつぶる。

はるか「開けたら殺すよ」

はるか、上着を脱ぐ。

はるか、腕まくりをして両腕の二の腕を

さらけだす。

はるか、両腕をあげ、二の腕のたるんだ部分を幸太郎の前に出す。

はるか「手、前に出して」

幸太郎、ゆっくりと両手を前に出す。

幸太郎、両手ではるかの二の腕を揉む。

はるか、嫌な顔をする。

幸太郎「（呟く）…こんなものか」

はるか「はい。おしまい」

はるか、まくった袖をさげる。

幸太郎、目を開ける。

幸太郎「（首を傾げる）もっとこう、想像ではフルーチェのような感じだと思っていたが」

○同・トイレ

はるか、蛇口の水で二の腕をゴシゴシ洗う。

○小野家・はるかの部屋（夜）

サンリオのぬいぐるみやグッズで溢れている。

はるか、勉強机で宿題をしている。

階下から声が響く。

優子の声「ただいまー」

○同・リビング

はるか、やってくる。

優子が上着を脱いでいる。

はるか「おかえり」

優子「ふー寒い。はるか、お兄ちゃんとかいってくれた？」

はるか「うん」

優子「どう？ 様子？」

はるか「：うん、まあ」

優子「お母さん、今日もこれから泊まりがけで病院いってくるから。悪いけどご飯はチンして食べて」

はるか「わかった」

優子「そうだ。これ」

優子、棚の上のDVDを手に取る。

はるか「…？」

優子「(懐かしい)探してたら出てきた。覚えてる？ 昔みんなで沖繩にいったこと」

はるか「沖繩？」

優子「はるかは何歳だったかな。その時に撮ったビデオ」

×

×

×

はるか、テレビの前に座っている。

### ○テレビ画面の映像

水着姿のはるか(5)と幸太郎(7)、砂浜で遊んでいる。

隣ではるか父がドデカい砂山を作っている。

優子の声「幸太郎！ はるか！ 見て！ パの砂山！」

はるか、砂山を見つめる。

はるか、砂山をけっ飛ばす。

優子の声「（笑い声を立てる）」

○小野家・リビング

映像を見て、

はるか「（ふっと笑う）」

○テレビ画面の映像

はるか、泣いている。

はるかの足下にかき氷。

幸太郎、自分のかき氷をはるかにあげる。

はるか、泣きやむ。

×

×

×

ピーチパラソルの下ではるか幸太郎、  
オセロをしている。

× × ×

幸太郎、はるかをおんぶしながら砂浜を  
走っている。

はるか、けらけら笑う。

○小野家・リビング

はるか、映像をじっと見ている。

○病院・大部屋（数日後・夕）

はるか、やってくる。

手にはバッグを持っている。

入口にクマのぬいぐるみ。

クマ「お姉ちゃんこんにちわ！」

はるか「（微笑む）こんにちわ」

はるか、幸太郎のベッドへ向かう。

はるか、カーテンの前に立つ。

はるか「お兄ちゃん着替えもってきた」

カーテンの中からビニール袋のシャカシヤカした音が聞こえる。

幸太郎「入れ」

はるか、カーテンを開ける。

幸太郎、涼しい顔で数学の教科書を読んでいる。

幸太郎「：サインコサインタンジェント。なるほどな」

幸太郎の脇にはビニール袋。

袋の中は使用済みティッシュの山。

はるか「(見て) …」

幸太郎、教科書を閉じる。

幸太郎「閉めろ」

はるか、カーテンを閉める。

幸太郎、神妙な面もちになる。

幸太郎「二つ目の願いをいおう」

はるか「…?」

幸太郎「初体験を済ませたい」

はるか、ぱっとカーテンを開ける。

はるか、カーテンの外に出る。

はるか、ぱっとカーテンを閉める。

はるか、病室のドアへと向かう。

クマ「お姉ちゃん、さようなら」

はるか「さようなら」

はるか、病室を出ていく。

○同・廊下

はるか、歩いている。

幸太郎、追いかける。

幸太郎「待てッ」

はるか「(無視)」

幸太郎「(苦しそうに)うっ…いててて…腹

がっ…お前のせいで…腹がっ」

はるか、立ち止まる。

○同・大部屋

カーテンで締め切られた空間にはるか

幸太郎。

幸太郎、ベッドに横たわっている。

幸太郎「(苦しそうに)もう少し病人を労れ：  
歩いたせいで：体が苦しい：」

はるか「：」

幸太郎「今話したように初体験の相手はお前  
じゃない：お前など：こちらから願ひ下げだ  
：お前には：初体験のための手はずを整えて  
ほしい」

はるか「願ひはもう叶えてあげたじゃん」

幸太郎「あれは一つ目の願ひ：今回は：二つ  
目の願ひになる」

はるか「一つ目とか二つ目って何？ 何で私  
に願うの？ 私ジーンじゃないよ」

幸太郎「：もちろんだ」

はるか「そういうのは友達に頼めばいいじゃ  
ん」

幸太郎「無理だ：学校での俺は下ネタを一切  
口にしないスーパーシャイボーイで通ってい  
る」

○アルバムソフトの画面

日付は「一月二十日」。

教室で女子と話す幸太郎の写真。

はるか「女子にからかわれて耳を赤くする  
兄」

○（戻って）大部屋

幸太郎「それにまとまった金が必要になる：  
デリヘル嬢を：ここに呼ぶための金が：」

はるか「無理だよ。お金なんか持っていないも  
ん」

幸太郎「：お前、お父さんが何で死んだか知  
ってるか？」

はるか「え？」

幸太郎「ガンだ：俺と：同じ：」

はるか「：」

幸太郎「入院してから：死ぬまで：あつとい  
う間だったよ：」

はるか「：」

幸太郎「だから俺にはわかる：今はまだで大  
丈夫でも：これから一気にくる：俺には時間

がないんだッ」

はるか「(仕方なく) …お金、いくら？」

幸太郎「10万…」

はるか「そんなにするの？」

幸太郎「当たり前だ…最上級ともなるとそれくらいが相場だ…」

はるか「…無理だよ。10万なんか」

幸太郎「やってもないのに最初から諦めてどうする…お母さんにそれとなく頼む…メルカリに手を出す…自販機を漁る…いくらでも方法はある」

はるか「…」

幸太郎「いいな…10万…是非でも集めてくれ…」

幸太郎、目を閉じる。

はるか「(ため息) やってみるけど、あんまり待しないでよ」

はるか、カーテンを開ける。

幸太郎「待て」

はるか、振り返る。

幸太郎、けろりと起きあがる。

幸太郎「ついでに三つ目の願いをいおう。もう一度あの感触を確かめておきたい」

○同・トイレ

はるか、蛇口の水で二の腕を洗う。

○小野家・はるかの部屋（夜）

はるか、勉強机で宿題をしている。

はるか「（ため息をつく）」

○同・リビング

はるか、やってくる。

優子、カバンに荷物を詰めている。

優子「悪いけど今日もお兄ちゃんここで泊まるから」

はるか「：お母さん」

優子「ん？」

はるか「メルカリをね、始めたい」

優子「メルカリって、ネットで売るやつだっ

け？」

はるか「そう」

優子「なんで？」

はるか「いらなくなったもの売りたいから」

優子「（呟く）あ。タオルもっていかなきゃ」

優子、廊下へ出ていく。

はるか、ついていく。

#### ○同・洗面所

優子、棚からタオルを取る。

はるか、優子の後ろに立っている。

はるか「始めるには親の承認が必要なんだって」

優子「ふうん。いいけど、気をつけてやるん

だよ。変な人とかも多いんだから」

はるか「わかった」

優子、廊下へ出ていく。

はるか、ついていく。

#### ○同・リビング

優子、カバンにタオルを詰める。

はるか、優子の周りをうろうろする。

優子「(はるかを見て) 何？」

はるか「(うじうじする)」

優子「なんかあんでしょ」

はるか「お願いがあるんだけど…」

優子「何」

はるか「ほしいものがあるの」

優子「いってごらん」

はるか「…ブランド物のバッグ」

優子「あんた、そんなの興味ないでしょ」

はるか「あるから頼んでるよ」

優子「いくらすんの？」

はるか「高い」

優子「いくら？」

はるか「…10万くらい」

優子「中学生がそんなもん持ってたらおかし

いでしょ」

はるか「…」

優子、手をとめてはるかを見る。

優子「はるか。何に使うか、ちゃんと教えてくれたら考えてあげてもいいわよ」  
はるか「じゃあいいよ…」

○中学校・廊下（翌日）

はるか、歩いている。

正面から速見がやってくる。

速見「（はるかを見て）小野。顔色がよくないが大丈夫か？」

はるか「はい…」

速見「お前は家のことで大変なんだ。あんまり無理するなよ」

はるか「（思い切って）先生、あの…」

速見「なんだ？」

はるか「…いえ、失礼します」

はるか、去っていく。

速見「…？」

○小野家・はるかの部屋（夜）

はるか、シナモロールのぬいぐるみをス

マホで撮影している。

はるか「(シナモロールへ)ごめんね。お前を  
売ることにした」

○病院・大部屋(数日後)

カーテンで締め切られた空間にはるか

幸太郎。

テーブルの上に千円と小銭が少し。

幸太郎「足りん」

はるか「∴」

幸太郎「これで全部か？」

はるか「これでもずいぶん売ったよ。サンリ  
オのグッズ」

幸太郎「(舌打ち)」

はるか「∴」

幸太郎、苛立ちながら考え込んでいる。

はるか、自分のカバンからオセロ盤を取  
り出す。

はるか、オセロ盤をテーブルに置く。

はるか「(明るく)見てこれ。懐かしくない？」

幸太郎「(無視)」

はるか「見てって」

幸太郎「うるさい。考え事してるんだ」

はるか「オセロ。昔よく勝負したじゃん。久しぶりにやりたい」

幸太郎、まじまじとはるかを見る。

幸太郎「やってどうする？」

はるか「やったら懐かしくて盛り上がるよ」

幸太郎「∴」

はるか「(思いつく)あそうだ。このお金でお菓子買ってさ、食べながらやろうよ」

幸太郎「∴」

はるか「私、なんか売店で買ってくる！」

はるか、テーブルの金を集める。

幸太郎「バカなマネはよせ！」

はるか、手にとまる。

幸太郎「オセロ？ オセロなんか！」

幸太郎、オセロ盤を払いのける。

床にオセロ盤が落ち、石が飛び散る。

はるか「∴」

幸太郎「俺にはもう後がないんだ。はるか、何としてでも金策を講じろ」

○小野家・はるかの部屋（夜）

はるか、キティちゃんのぬいぐるみの前に立つ。

はるか「（キティちゃんへ）しょうがない。お前も売り飛ばすか」

○同・リビング

はるか、やってくる。

優子、仏壇の前に座って線香をあげている。

優子、はるかに気づく。

優子「はるか。お父さんにお線香あげる？」

はるか「：うん」

優子、立ち上がる。

はるか、仏壇の前に座る。

はるか、ろうそくの火に線香をかざす。

優子「：幸太郎がお腹を痛がって病院に行く

ちよっと前にね、あの子、何回か腹痛を起こしてたの」

はるか「…？」

優子「病院にいかかっていったんだけど、幸太郎が大丈夫っていうからそのままにした」

優子、鼻をすする。

はるか、はっとする。

優子「（涙混じりに）私がしっかりしてればよかったのにね。何でもっと早くに気づいてあげられなかったのかな」

優子、涙を拭う。

はるか「…」

○病院・病室（翌日）

カーテンで締め切られた空気にはるか

幸太郎。

幸太郎「パパ活をしろ」

はるか「は？」

幸太郎「世の中にはロリコンが多い。中一女

子の需要を考えれば10万など容易い。名案  
だろう」

はるか「…何いつてるの」

幸太郎「パパ活だ。道具としてマッチングアプリ  
プリを使え」

はるか「意味わかんない。マッチングアプリ  
なんか使えるわけないじゃん」

幸太郎「お母さんの財布から免許証くすねて、  
それをスクショして登録すればいい。頭を使  
え」

はるか「犯罪じゃん」

幸太郎「大願成就のためだ」

幸太郎、俄然張り切る。

幸太郎「よし。そうと決まれば善は急げだ。

早速作戦に取りかかれ」

はるか、その場から動かない。

幸太郎「どうした？」

はるか「(声を震わせ)…いいかげんにして」

幸太郎「…？」

はるか「そんなに10万円がほしいの？ 妹

に援交までさせようとしてさ」

幸太郎「援交じゃない。パパ活だ」

はるか「どっちでも同じだよ！」

幸太郎「…」

はるか「他に考えることはないの？ そんなくだらないことばっかじゃなくて」

幸太郎「なにがくだらないんだ」

はるか「くだらないよ！ お母さん、家で泣いてるんだよ！ お母さんの気持ち考えたことあるの？ 私の気持ち、考えたことあるの？ お兄ちゃん勝手すぎるよ！」

幸太郎「…」

幸太郎、はるかを見つめる。

幸太郎「…はるか、オススメのアプリは

Tinderだ」

はるか「(睨む)」

幸太郎「やれ！」

はるか「やだ！」

幸太郎、苦しみ出す。

はるか「いい加減に…」

幸太郎、ベッドに倒れる。

はるか「：？！」

○同・治療室

幸太郎、ベッドの上で呻いている。

医者、懸命に幸太郎を診ている。

優子、駆けつけてくる。

優子「（夢中で）幸太郎！ 幸太郎ッ！」

○同・大部屋（夕）

はるか、カーテンの隙間から幸太郎のベッドをのぞく。

幸太郎、優子にしがみついている。

幸太郎、泣いている。

はるか「（幸太郎を見つめて）…」

○小野家・はるかの部屋（夜）

はるか、スマホをいじっている。

スマホ画面に「Finder」のアプリ。

優子の免許証が表示されている。

はるか、登録ボタンをおす。

登録完了画面が表示される。

はるか「∴」

と通知が鳴る。

次々と通知がきて、鳴り止まない。

はるか「(驚く)」

はるか、受信メッセージを見る。

「やらせてよー」

「とりあえずLINE教えて」

「これから会おう」

「20マソでも30マソでもいいよ」

「LINE教えて」

「今から会える？」

「君のパパだよ」

といったメッセージで溢れかえる。

はるか「(怖くなる)」

ドアがノックされる。

はるか、とっさにスマホを隠す。

優子、ドアを開けて入ってくる。

優子「幸太郎、落ち着いた。ぐっすり寝てる

よ」

はるか「…うん」

優子「はるか。お兄ちゃんにもし何かあったとき、あんたも後悔のないようにね」

はるか「…」

○中学校・教室（翌日）

はるか、授業を受けている。

○同・トイレ

はるか、スカートからスマホを取り出す。

はるか、スマホをいじる。

Tinder のアプリ画面に以下のメッセージ。  
ジ。

「イカせてあげる」

はるか「…」

○小野家・はるかの部屋（夜）

はるか、スマホをいじっている。

はるか、以下のメッセージを送る。

「ほんとに10万くれるんですか？」

すぐさま以下のメッセージが届く。

「君が本当に未成年ならね」

送り主はヨシキ。

続けざまにヨシキからメッセージが届く。

「明日、会える？」

「僕のラブドールになってくれたら10万あげる」

はるか「ラブドール…」

はるか、スマホで「ラブドール」と検索する。

卑猥な人形の画像がずらりと出てくる。

はるか「(眉を顰める)」

○中学校・教室（翌日）

はるか、元気がない。

速見、やってくる。

速見「小野、どうした？」

はるか「…男の人ってどうして汚らわしいんですか？」

速見「え？」

はるか、目頭を押さえる。

速見「（動揺して）…ど、どうした？」

はるか「先生、ごめんなさい。私、悪い生徒です」

速見「…？」

はるか「失礼します」

はるか、立ち去る。

速見「おい?!」

○駅前（夕）

はるか、緊張した面もちで立っている。

はるか、赤い色のニット帽を被っている。

はるか、スマホを見ている。

ヨシキからのメッセージ。

「赤いニット帽だね。待っててね。僕のラブドール」

×

×

×

速見、歩いている。

速見、スマホを見ている。

画面には Tinder のメッセージ画面。

アカウント名はヨシキ。

以下のやりとりが表示されている。

「赤いニット帽を被ってます。ほんとに

10万くれるんですか？」

「赤いニット帽だね。待っててね。僕の

ラブドール」

速見、スマホをしまう。

速見「(ぶつぶつ) 赤いニット帽…」

速見、見渡す。

速見、赤いニット帽を被ったはるかを見

つける。

速見「(驚く)」

はるか「(気づく)」

速見、慌ててその場を立ち去ろうとする。

はるか「(叫ぶ) 先生！」

速見「え？」

はるか「なんでいるの?!」

速見「え、いや…」

はるか「（目を潤ませ）私が心配で探してくれ  
たの？！」

速見「そそそうだ。お前の様子が何だか変だ  
ったから。うん」

×

×

×

速見「そうか。怖かったろうに…だが先生が  
きたからもう安心だ」

通行人、はるかと速見を見る。

速見、通行人を睨みつけ、

速見「お前か！」

通行人「…？」

はるか「先生、男の人ってなんでそんなこと  
ばかり考えるんですか？」

速見「…」

はるか「兄に家族のことを考えてほしいと思  
うことは悪いことなんですか？」

速水「お前の気持ちはよくわかる。でもな、

小野。お前は汚らわしいと思うかもしれないが、そういうことは別におかしなことじゃない。当たり前のことなんだ」

はるか「…」

速見「(黄昏る) 遠い昔、日本で悲惨な戦争があった。もう80年近く前のことだ。その戦争によって多くの若者が特攻隊として散っていった。その純粋な若者たちでさえだ。最後の夜はそうやって過ごした」

はるか「…じゃあ、先生もそうなの？ 先生も家族よりもそっちをとるの？」

速水「(きっぱり) 俺は違う」

はるか、考える。

はるか、スマホを取り出す。

速見「小野？」

はるか「待ち合わせした人に連絡してみます。やっぱり10万、手に入れなくちゃ」

速見「ちょ…」

はるか、スマホをいじる。

速見、力づくで自分のスマホを割る。

割れる音がする。

はるか「(顔をあげる) …?」

速見「(とぼける)」

○道

はるかと速見、歩いている。

速見「後は一人で帰れるな」

はるか「(頷く)」

速見「悪いな。力になれなくて」

速見、立ち去る。

はるか「先生！」

速見、振り返る。

はるか「さっきから思ってたんですけど、私の待ち合わせ相手ってもしかして先…」

速見「(遮って) 10万を出そう」

○病院・大部屋

カーテンで締め切られた空間にはるか

幸太郎。

幸太郎、10万円の札束を熱心に数えてい

る。

幸太郎「なるほど。速見を脅してぶんどったのか」

はるか「うん」

幸太郎「(上機嫌で)よくやった。これから業者に電話する。お前は部屋の外で見張ってる」

×

×

×

はるか、カーテンの外に立っている。

カーテンの奥から幸太郎の声が聞こえる。

幸太郎の声「そんな…子供じゃないですよ。」

「5歳は四捨五入すれば二十歳です。立派な成人です」

幸太郎の声、ヒートアップする。

幸太郎の声「だからナース服でくればバレないですよ！…年齢ですか？ さっきから二十歳っていつてるでしょ！」

幸太郎の声、やむ。

幸太郎の声「クソがっ！」

はるか、カーテンの中を覗く。

幸太郎、スマホを投げ捨てる。

孝太郎、ふてくされて布団に潜り込む。

はるか「…」

はるかの近くで、マイクを持った女の子がクマのぬいぐるみを通してしゃべっている。

はるか、見て、

はるか「何かひらめく」

○小野家・はるかの部屋

はるか、スマホをいじっている。

画面にはTinderのメッセージ画面。

はるか、ヨシキに以下のメッセージを送る。

「先生、オススメのラブドールを教えてください」

× × ×

スマホ画面に以下の警告文。

「18歳以上ですか？」

はるか、「はい」をタップする。

ラブドールがずらりと出てくる。

はるか「…」

○病院・大部屋（夜）

幸太郎、布団に覆い被さっている。

幸太郎「一人にしてって！」

優子、すねる幸太郎に困惑している。

○小野家・玄関（翌日）

はるか、ドデカい段ボールを抱えている。

○同・はるかの部屋

はるか、段ボールを開ける。

ラブドールのパーツがバラバラになって

入っている。

はるか、頭部を取り出す。

はるか、説明書を見て組み立てていく。

×

×

×

ラブドール、完成する。

はるか、生々しい肉体を宿したラブドールに息をのむ。

はるか「リアルだ：」

とノックの音。

はるか、大慌てでラブドールをベッドの布団の中に隠す。

はるか、ベッドの上に座る。

優子、入ってくる。

はるか、ベッドにあったフェイスタオルを振り回す。

優子「(怪しげに)：何してんの？」

はるか「うん？ 別に」

優子「幸太郎、すねちゃってる。はるか、なんか知ってる？」

はるか「知らない」

優子「そう：」

優子、去る。

はるか「(ほっとする)」

はるか、スマホを手にする。

はるか、スマホをいじる。

画面にTinderのメッセージ画面。

以下のメッセージをヨシキに送る。

「先生、ラブドールにスピーカーとマイクを取り付けてください」

○車内（夜）

速見、運転している。

後部座席にはるかとラブドール。

速見「付け焼き刃だが、スピーカーとマイクを取り付けたから遠くからでもやりとりできるはずだ」

はるか「はい」

速見「もうすぐ着くぞ」

はるか「先生、このことは誰にもいわないでください」

速見「もちろんだ」

はるか「私も誰にもいわないので」

速見「…」

○病院・外

車、停まる。

はるか、ラブドールを持って車から降りる。

速見「うまくイクといいな」

はるか「…先生、サイテーです」

速見「(え?)」

はるか、ラブドールと肩をくみながら歩き出す。

○病院・大部屋(夜)

静寂な室内。

幸太郎、ベッドの上でじっと天井を見つめている。

カーテンに人影ができる。

声「妹から頼まれてきました」

幸太郎「…?」

カーテンの隙間からラブドールが顔を覗

させる。

キヨミ「キヨミといます」

幸太郎「（驚く）」

キヨミ「入っていい？」

幸太郎「（焦って）あ、はい」

キヨミ「恥ずかしいから目つぶってて」

幸太郎、目をつぶる。

はるか、キヨミを抱えて入ってくる。

キヨミの後頭部にスピーカーがついてい  
る。

はるか、キヨミを幸太郎の隣に置く。

○同・廊下

はるか、イヤホンをつける。

はるか、マイクへ向かって、

はるか「（大人びた声音で）目、開けていいよ」

○同・大部屋

幸太郎、緊張している。

幸太郎「胸、触ってもいいっすか？」

キヨミ「いいよ」

幸太郎、キヨミの胸を触る。

幸太郎「すごくフルーチェっす」

キヨミ「そう」

幸太郎「あ。乳首舐めてもらっていいっすか？」

キヨミ「うーん。舐めてほしいかな」

幸太郎「わかりました」

幸太郎、布団に潜り込む。

幸太郎、ややあって布団からでてくる。

幸太郎「気持ちよくないっすか？」

キヨミ「え？」

幸太郎「いえ、喘ぎ声とかって」

キヨミ「ああ：あんっ」

○同・廊下

はるか、顔を真っ赤にする。

はるか「あんっ」

○同・大部屋

幸太郎、キヨミに覆い被さっている。

○同・廊下

幸太郎の声「自分いきます」

はるか「あんっ」

幸太郎の声「いきます」

○同・大部屋

幸太郎、満ち足りた顔。

隣にキヨミ。

幸太郎「自分、死ぬ前に男になれて幸せです。

もう悔いはないっす」

キヨミ「そう」

幸太郎「ただ…」

幸太郎、言いよどんで、

幸太郎「自分、一つ心残りがあるとすれば妹のことっすかね」

○同・廊下

はるか、はっとする。

はるか「え？」

○同・大部屋

幸太郎「うちの家系、男が弱いんすよ。父親も俺が小さい時に死んじゃって、自分もこのザマで…」

キヨミ「…」

幸太郎「だから、なんかかわいそうだなって」

キヨミ「…」

幸太郎「でも大丈夫っす。母のことは天国で父が見守ってるはずだから、俺は妹を見守るって決めてるんです。だから絶対大丈夫っす」

キヨミ「(すすり泣く)」

幸太郎「(驚く) え?!」

幸太郎、あたふたする。

幸太郎「自分、ダメだったっすか？」

○同・廊下

はるか、泣いている。

はるか、顔をうずめるように兄のいる病室の壁によりかかる。

○アルバムソフトの画面

棺の中で眠る幸太郎の写真。

日付は「3月21日」。

はるか㊦「安らかに眠る兄」

ページがめくられる。

告別式で弔文を読む同級生の写真。

はるか㊦「弔文を読む兄のクラスメート」

ページがめくられる。

しっかりと前を向く優子の写真。

はるか㊦「気丈に振る舞う母」

ページがめくられる。

うつむいているはるかの写真。

はるか㊦「無理やり泣こうとする私」

ページがめくられる。

走り出す霊柩車の写真。

はるか㊦「出棺する霊柩車」

ページがめくられる。

パトカーに乗せられる速見の写真。

はるか㊦「連行される先生」

ページがめくられる。

日付は「3月22日」。

トイレで泣く優子の写真。

はるか「トイレで嗚咽する母」

トイレの前で佇むはるかの写真。

はるか「つられて泣く私」

○小野家・リビング（一週間後）

幸太郎の仏壇。

遺影の幸太郎、笑っている。

優子、中トロを供える。

はるか、中トロにワサビを添える。

優子「幸太郎、きつと喜んでるね」

はるか「（満足げ）」

優子「…はるか、もう二度と危険なマネはし  
ちゃダメだよ」

はるか「え？」

優子「元担任の先生から全部聞いたよ。幸太  
郎のバカな願いを叶えてあげたんだって？」  
はるか「（バツが悪い）」

優子「（微笑む）」

はるか「：お兄ちゃん、幸せだったのかな」

優子「幸せだったに決まってるじゃない」

優子、はるかの背中を抱きしめる。

優子「だってこんなにかわいい子が妹なんだから」

はるか、笑顔の幸太郎を見つめる。

遥香「（笑う）」

（おわり）